



四 おしっこ王子の給食談義

午前中の授業がようやく終わった。待ちに待った給食の時間だ。今日のおかずはなんだろう。机を向かい合わせて、四人でひとつの班となる。京子ちゃんは向かい側。幸一君は僕の右隣。幸一君の向かい側は優子ちゃんだ。パン。牛乳。バナナ。コンソメスープ。そしてメインディッシュは若鳥のから揚げで、僕の大好物だ。

「うん。いい匂いだな」おしっこ王子がポケットから顔を覗かす。さっきまで、ポケットの中で折りたたむように眠っていたはずなのに、匂いにつられて目が覚めたのか。

「牛乳とコンソメスープか。僕の担当だな」

「僕の担当？」

「そう。僕はおしっこ王子だから、水分から栄養素を吸収するのが仕事なんだ」

「じゃあ、ここにいてもいいの？お腹の中に戻らないといけないんじゃないの？」

「本当なら、現場に戻らないといけないんだけど、今日は部下に任せているんだ」

「部下？そんなに若いのに部下がいるの？」

僕はびっくりした。僕なんかまだ子供だから、組織のことはわからない。スポーツ少年団で野球をやっているから、チームメイトのことならわかる。でも、僕はキャプテンじゃない。

「僕は王子だよ。当然だよ」

胸を張るおしっこ王子。

「誰と話をしているの？」

京子ちゃんはもう席についている。

「いや。今日は僕のお好物のから揚げだから、喜んでいるんだ」

「ふーん。ハヤテ君はから揚げが好きなんだ。じゃあ、ひとつあげようか」

京子ちゃんをはじめ、みんなのお皿の上には五個のから揚げがのっている。

「から揚げなら僕だって好きだよ」

横から幸一君が身をのりだしてきた。

「マクドナルドのチキンナゲットやケンタッキーのチキン、香川県名産の鳥の足や、それに田中屋のから揚げも好きだよ」

「なんだい、その田中屋って？」

「家の近所の肉屋さんだよ」

「家の近所に肉屋さんって、あったっけ」

「あったよ。から揚げだけでなく、コロケも美味しいんだ」

「じゃあ、今度一緒に行こうよ」

「行く。行く」

僕と幸一君はから揚げの話題で盛り上がった。

「そんなことより、今は給食の時間よ。早く「いただきます」の準備をしなくちゃ」

京子ちゃんが僕たちをうながす。僕たちは話をやめ、背筋をピンと伸ばした。

「いただきます」

給食係の号令で食事が始まった。

「さあ、みんな。準備はいいか。もうすぐ昼食がやってくるぞ」

大王が周囲を見渡す。部下たちは全員、持ち場についている。ツルハシをかついでいる者、スコップを地面に垂直に立てている者、ホースを握り締めている者、様々だ。

「アイアイサー」と気合を込め、大王に向かって返事をする。

一人浮かない顔はリキッド班の隊長。

「隊長、どうしたんですか」

部下が心配そうに尋ねる。

「ううん。まだ、王子が帰って来ないんだ」

「そうですか。でも、もうすぐ、牛乳やスープが運ばれてきます。急いで、消化活動に取り掛からないといけません」

「そうだな。王子を待っていても仕方がない。我々だけで乗りきろう。さあ、仕事だ」

「アイアイサー」

リキッド班員はぐるぐる巻きのホースを長く伸ばし、それぞれの持ち場所に着いた。

僕はパンをほおぼり、コンソメスープを飲み、唐揚げをかじり、野菜を放り込む。口の中は休む暇がない。それに、隙間もない。

「そんなに慌ててなくてもいいんじゃない。もう少し、ゆっくりと噛みしめながら食べたほうがお腹にもいいよ」

胸ポケットから首を出したおしっこ王子は、僕が給食を食べているのを凝視している。

「昼休みにドッジボールをするから、急いで食べているんだ」

周りのみんなに聞こえないように小声でつぶやく。そう答える間にも、バナナの皮をむいている僕。

「急ぐ気持ちはわかるけれど、お腹の中では、一度に、大量に食べ物が入ってきたら、消化活動が大変なんだ。大王や僕、部下たちはてんてこまいさ。消化活動が十分にできなくなる。君だって、一度に、算数や国語、社会や理科の宿題が出されたら困るだろう」

うーん。おしっこ王子の言うことはもっともだ。僕は食べる速度を少し遅くした。隣の幸一君が

「ハヤテ君、どうしたんだい。急にゆっくり食べだして。早く食べないと、ドッジボールに遅れるぞ。遅れてもしらないぞ」

幸一君はデザートバナナまで食べ終えている。後は口の中に残っているバナナを飲み込むだけだ。

「急いで食べるとお腹の中の人たちが困るんだ」

「なんだい？そのお腹の人たちって？」

しまった。つい、おしっこ王子が言ったことを口にした。

「いやあ。食べ物の消化がしづらいつてことだよ」

「そうよ。早く食べることはよくないわ。じっくりと味を噛みしめながら食べないといけないわ。急いで食べたら、ハヤテ君の言う通り、お腹がびっくりするわ」京子ちゃんが僕たちの会話に割って入ってきた。

「そうよ。京子ちゃんの言う通りよ。男子は、遊ぶことばかり考えて、体のことは何も考えていないんだから」優子ちゃんも続く。

京子ちゃんや優子ちゃんが話掛けてくれたおかげで、幸一君におしっこ王子やうんこ大王のことは話さなくてもすんだ。

「わかったよ。ゆっくり食べるよ。女子はいつも母親みたいなことを言うんだから」

幸一君は半ばあきらめながら、口の中のバナナをゆっくりと噛みしめている。

「そりゃそうよ。あたしたち女子は、いつか母親になるんですもの。今から母親の準備をしておかなくちゃ手遅れになるわ。何も考えていない男の子を育てるのは大変なんだから。ねえ、優子ちゃん」

「そうよ、京子ちゃんの言う通りよ。ほんと、男子って目先のことしか考えないんだから」

女子は強い。女子に母親の顔を見ると、僕たち男の子はつい黙ってしまう。なぜなら、家でも母親の前では同じだからだ。

「ほら、僕の言った通りだろ。女の子たちはよくわかっているよ」

おしっこ王子が胸を張りながら、僕だけに聞こえるように囁く。

僕と幸一君はドッジボールに行きたくてバタバタしている足を抑えながら、母親になる予定の京子ちゃんと優子ちゃんの命令通り、最後のバナナは味を噛みしめながら食べ終えた。